

# 広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー  
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



エリア・コンサルティング

昨年夏、レクサスギャラリー・高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しいものプロダクトか?」「地域のオリジナルティヤーはあるか?」「コンセプトやターゲットは明確か?」など、サポートメンバーから真剣な

## レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



1月18日、プレゼンテーションにて全国の匠との集合写真

させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の一つである「二律双生を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。新潟県選出の匠、新潟漆器職人・真田桃子さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏(建築家/東京大学教授)、グエナエル・ニコラ氏(デザイナー)、清川あさみ氏(アーティスト)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

「伝統を守りながら」「新しい感覚やテクノロジーを吹き込む。」「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展

# 変わり塗りの宝庫 新潟漆器 酒脱の技 今に伝える 懸け箸に

「これは…難しい」。思わず言葉が口をしいて出た。「でも面白い」。

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」の応募に当たり、プロダクトデザインは新潟市のデザイナー石川竜太さんに託していた。初めて、作品のイメージを目にした時の衝撃は忘れられない。四角箸の面に、竹のように見える「竹塗り」や、金属の質感



プレゼンをする真田さん

を思わせる「朧(おぼろ)銀塗り」を施す。新潟漆器の妙技である二つの塗りが一つの作品の中で強く個性を主張している。

「あえて相反するような塗りを組み合わせること」「112以上のインパクトが生まれる。とても斬新」。そう直感に訴えてきた。



バイヤーに商品説明をする真田さん

最終的には、鏡のような「鏡面仕上げ」も取り入れるなど、持てる技術を総動員した箸や匙は、角度によってまったく異なる表情を見せる。「見立ての粋を楽しんでほしい。作品名「mitate」に込めたのは、遊び心と、塗師としての自負だ。



新潟漆器の伝統技法を組み合わせた「mitate」。変わり塗りの妙を楽しめる

真田桃子  
新潟県/新潟漆器職人

### クール。だから、伝えたい

人との出会いで、人生が大きく変わることがある。真田さんもその一人だ。

後に婚約者となる佐藤圭太さんと出会い、真田さんの運命は一変した。佐藤さんは国指定の伝統的工芸品「新潟漆器」を取り扱う企業の役員。すべに、多彩な塗りを特徴とする新潟漆器に魅せられた。

迷いはなかった。周囲の驚きをよそに、当時フリーターだった真田さんは自宅に併設する蔵を仕事場に換え、塗師としての修業を始めた。24歳の時のことだ。

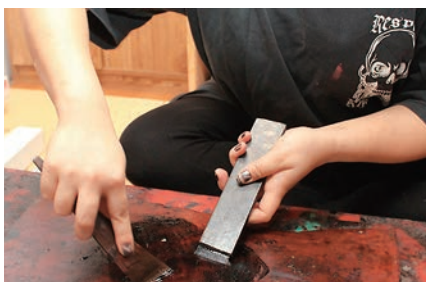
乾いた砂が水を吸い込むように、猛烈に、そして急速に技術を吸収した。その陰で、夜も寝付けないほどの漆がぶれに悩んだが、やめようとは思わなかったという。

「美しいモノを作りたい」と。ただそれだけを考えていた。



真田 桃子  
新潟県/新潟漆器職人

1989年新潟県新潟市生まれ。2013年伝統的工芸品・新潟漆器の職人となり、ドイツ・アンビエンテ2014・2016に「百年物語」開発商品を出品。以降、数々の国際展示会に出品。2016年イタリア・ミラノ・サローネDENSAブースに「lump」出品。また07新潟農業大臣会合で、各国閣僚向けの記念品として「竹塗萬代箸/箸置/くい呑」が採用された。



新潟漆器職人真田さんの手

揺るぎない信念。それが少しずつ変化する。後継者不在による技能継承は全国的な課題だが、新潟漆器もそれは同じだ。最盛期には数百人を数えたが、新潟市漆器同業組合(新潟市)に所属する職人は現在、十数人にすぎない。

「400年の歴史がある新潟漆器を未来に残し、もっと広めていかなければならない」。いつしか一人の塗師としての自覚が芽生えていた。

「特別な時、特別な場所に、ふさわしい。それだけの技術と魅力が新潟漆器にはある」と言い切る。

### 仲間と共に これからも

今回匠に選ばれたことで、気付いたことがあるという。

作品デザインや木地の制作、材料調達など多くの人が関わって、初めて作品は完成する。一人でできることには限りがある。「そんな当たり前のことに、あらためて気付かされた。そして、私は支えられる仲間にも恵まれている」と。

「カッコいい新潟漆器をもっと、もっと世界に広めたい。このプロダクトは、魅力を伝えていく一歩となれば」。力強く、真田さんは語った。



かつて北前船の寄港地として栄えた港町新潟。その影響で、さまざまな漆塗りの技法が全国からもたらされた